

小泉八雲を知る旅

はじめに

NHK「連続テレビ小説」、通称「朝ドラ」は、1961年から始まり、現在放映中の2026年度前期『風、薫る』で第114作目です。「連続テレビ小説」というネーミングは、新聞の朝刊の連載小説を意識して命名されたそうで、この六十有余年の間に放送時間や放送開始時刻などの変更があり、現在、1年間を前期と後期に分けた半年間の15分番組として朝8時にスタートしています。以下は、NHKが最初から全作をまとめた一覧です（2026年7月5日時点では『あんぱん』まで）。

[朝ドラ全史 | 番組 | NHKアーカイブス](#)

私はかなり以前から平日のルーティンとして、朝ご飯を食べながら“日本の朝の顔”のようなこの国民的番組の前に居ます。どちらかと言えば楽しんでいるほうですから、いつも一作が終われば、朝が少し変わってしまったようなぼんやりした違和感や、いわゆる「〇〇ロス」の寂寥感めいたものを覚えます。が、変わり身も早く、次に始まった新作もたちまちに楽しんで見ており、それまでのドラマの世界が次第に遠のいていきます。

そんな私ですが、前作の朝ドラ『ばけばけ』には、放送中も終了してからも自分の中にざわつくものがありました。ドラマについてというより、ドラマのモデルであった小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が気になったのです。もちろん、ドラマのヒロインのモデルあった彼の妻、小泉節子（戸籍上は小泉セツ）、そして、二人の関係性や生活にも興味が湧きました。

八雲が熊本五高で教鞭をとったことも、「耳なし芳一」などの怪談話の著作があることも知っていました。が、知っているのはそれだけ。彼が教えた熊本の学び舎にかつて身を置いた私ですが、それ以上知ろうともせずに過ごしてきました。そして3年近く前でしたが、彼のある著書に収載された一編をYouTubeの朗読で聴く機会があり、聴き終えた私はなぜか涙が込み上げて仕方ありませんでした。久々に流した涙でした（その作品については、いずれまたの機会に）。

そんな心が震える経験をさせてもらった八雲なのに、その時もやはり知ろうとはしなかった。そこに来てこのドラマがスタート。しかも、八雲の生誕は1850年で、私はその100年後の1950年生

まれ。セレンディピティめいたこの機縁に、『ばけばけ』の週タイトル風に言うと、私は八雲のことを「シル、ナイ、モッタイナイ。」「ワタシ、カク、シマス。」と思い立ったのです。

八雲は多彩な分野で多くの著書を残しており、全作品、書簡（手紙）まで収録した『小泉八雲全集』（大正 15 年～昭和 2 年頃に出版）は、全 18 巻に上ります（17 巻＋別巻 1）。それをひもといているわけではありませんが、著作や関連図書をドラマ終盤近くから仕事の合間に少しずつ読んでいる私には、彼の後ろ姿がちょっとだけ見えてきました。

どれだけ時間をかけても、いや、かければかけるほど、彼の広く深い世界は、私には迷ってしまうしかない樹海かもしれません。が、とにかく、八雲を知る旅に出ました。史実を探りながら、また、この旅のきっかけとなったあのドラマのことにも寄り道しながら、綴っていきたいと思います。